

王立建造物局総監マリニー侯爵とゴブラン製作所の連作〈神々の愛〉について

小林亜起子 (東京藝術大学)

タピスリー連作〈神々の愛〉は、マリニー侯爵アベル＝フランソワ・ポワソン・ド・ヴァンディエール (1727-81) の王立建造物局総監着任後、ゴブラン製作所で最初に織られた作品である。マリニーのために制作された第 1 エディションの下絵は、フランソワ・ブーシェ、カルル・ヴァン・ロー、ジョセフ＝マリー・ヴィアン、ジャン＝バティスト＝マリー・ピエールが提供した。本作は神話の愛の諸場面を取り上げた 4 点の大型下絵と、それに関連するアモルが表された窓間壁を飾る 4 点の縦長の下絵に基づくタピスリーから構成され、1758～59 年末に完成をみた。ポンパドゥール夫人のために作られた第 2 エディションには、ブーシェとノエル・アレの下絵に基づく新たな構図が追加された。その後 18 世紀第 3 四半期にかけて、王立絵画彫刻アカデミーの歴史画家の手になるモデルが加わり、連作を構成する主題の数は増えていった。本作はアカデミーの主導的な画家たちによる一大連作企画であり、18 世紀ゴブランを代表する作品として重要性をもつ。

連作〈神々の愛〉については、注文主であるマリニーやポンパドゥール夫人の趣味の視点から言及されてきたが、作品の特質や制作意図について十分な検討がなされてきたとは言い難い。本発表では、この連作の出発点となる第 1 エディションの分析を通じて、その制作過程と創意を明らかにするとともに、王立建造物局総監マリニーにとってこのタピスリー企画にいかなる狙いがあったのかを検討する。

第 1 エディションの 4 点の大型作品についてジャン・ヴィテ (2014) は、「神々の愛」という詩的タイトルにも関わらず、ブーシェの作品以外は略奪などの場面が取り上げられており、明確なプログラムが欠如していると指摘している。これに対して発表者は、本連作がブーシェの下絵に基づき、ボーヴェ製作所で織られ成功を収めていた同主題の連作を強く意識して構想された可能性を提示したい。大型作品の場面選択に一貫したプログラムを読み取ることは難しいにせよ、ボーヴェとゴブランの連作との比較により、4 つの主要場面の選択に共通した特徴と描写上の独自性があることを明示し、ゴブランの検査官としてのブーシェの役割に新たな光を当てる。

連作〈神々の愛〉はもともと、マリニーの新居を飾るために構想された企画であった。マリニーは王立建造物局総監としてゴブランの運営について助言する立場を利用し、自身の用途のために新作企画のイニシアチブを取ったわけだが、第 2 エディション以降も、この連作の新しい大型下絵の制作がアカデミーの歴史画家たちに依頼され続けたことは注目に値する。マリニーは本作の制作企画を通じて、アカデミーの史料編纂官シャルル＝ニコラ・コシャンの助言を受け、大型絵画制作の機会が減りつつある歴史画家の活動を支援することで、アカデミーとゴブラン、二つの王立機関の発展と繁栄を目指したのである。